



対面コミュニケーションにおいて機械翻訳がいかに 位置付けられるのか : 在中日系企業の日本人駐在員 の事例から

朱, 藹琳

(Citation)

年報Promis, 4(1):38-54

(Issue Date)

2026-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100504111>



〈論文〉

対面コミュニケーションにおいて機械翻訳が
いかに位置付けられるのか
—在中日系企業の日本人駐在員の事例から—

The Positioning of Machine Translation in Face-to-Face Communication: A case study of Japanese expatriate staff in China

朱 藹琳
ZHU Ailin

Summary

This study examines how a Japanese expatriate in a Chinese subsidiary utilizes machine translation (MT). It also considers how MT is positioned within the overall communication process. Based on a semi-structured interview, six cases were analyzed. The findings show that MT is treated as a supplementary and flexible resource rather than a fully reliable or central tool. The participant strategically adjusts MT use depending on the interlocutor, context, and interactional goals. Even when using MT, the participant maintains agency, actively interpreting and reconstructing meaning through translated texts, gestures, contextual knowledge, and so on. The study also shows that, although the participant has authority at work, limited Chinese language skills influence MT use. These results suggest that the use and impact of MT are shaped by the user's judgment and management of interaction.

キーワード

機械翻訳、対面コミュニケーション、日系企業、日中翻訳、中日翻訳、相互行為

I はじめに

2025 年春、とある日本のニュース動画が中国の SNS で注目を集めた。それは、ニュー

ス番組のアナウンサー（日本語使用者）が、大阪万博で自動翻訳機を使って中国語を話す来場者に取材した動画であった。取材では、アナウンサーは「何がすごかったんですか？」と発問し、翻訳機が「有什么了不起的？」に訳した。この訳文は元発話と対応関係があるように見えるが、中国語話者にとって実は挑発的な発言であり、「何が偉そうに」というニュアンスで捉えられる。しかしこの訳出に対して、取材された中国語話者は的確に意味を理解し、「啊我刚到这里，还准备开始看」（機械翻訳の訳出：ああ、ここに着いたばかりなのに、まだ見始めるつもりです）と答えた。すなわち、聞き手である中国語話者は、機械翻訳による挑発的な訳出表現に惑わず、万博会場の見どころについて質問されているというアナウンサーの発話の真意を汲み取った上で回答した可能性が考えられる。勿論、実際放送された動画だけではやりとりの全貌をつかむことができないが、こうした行動は考察の対象として興味深い。機械翻訳を介したコミュニケーションにおいて、機械翻訳による訳出がいかに理解され、コミュニケーションがいかに成立するのかといった点は注目に値する研究テーマであろう。

機械翻訳技術は近年、技術の社会的実装および普及を果たしたといえる。言語の規則によって原文の構文を解析し訳文に構造的変換を行う「規則ベースの機械翻訳」から、過去の翻訳用例に基づく「用例ベース機械翻訳」、そして対訳データおよび統計的な考え方に基づく「コーパス・ベース機械翻訳」に発展してきた。現行の「ニューラル機械翻訳」もコーパスに基づく機械翻訳であるが、対訳コーパスから自動的に深層学習が可能である点では、以前の機械翻訳と比べてはるかに優れた訳出精度を実現した。AI を駆使したニューラル翻訳はさらに、人工知能が内部言語を構築している可能性が指摘されており、学習する過程や訳出する過程を含めた内部がブラックボックスになっていることが明らかになった（西島 2019）。例えば上記のニュース動画における事例の場合、挑発的な表現が含まれなかった日本語原文に対して、機械翻訳がなぜ挑発的な表現で訳出したのかは不明ではあるが、その場にいる参加者は機械翻訳による訳出を文字通りに受容しなかった。元来、同一の言語表現であっても複数の意味として理解され得るものであり、その解釈は、受容者がその場のコンテキストなどさまざまな要因に左右されながら行うものである。機械翻訳を介したコミュニケーションにおいては、こうした解釈のあり方が、参加者によって機械翻訳がどのように位置付けられているかに大きく関わると考えられる。

本稿は上記の問題意識を前提とし、中国の日系企業に務める日本人駐在員を対象とし、いかなる場面で機械翻訳を利用するかまたは利用しないか、利用する場合はどのような使い方をしているのかについて調査して分析する。その結果を踏まえて、こうしたコミュニケーションにおいて参加者がいかに機械翻訳を位置付けて、そして機械翻訳を用いてコミュニケーションを構築しているのかについて考察する。

本稿における「機械翻訳」は、「コンピュータのような知的機構を利用した自動翻訳、こうした自動翻訳サービスが使えるデバイス・アプリ」（西島 2019）と定義する。西島（2019）は、ここでの「コンピュータのような知的機構」とは「人工知能」のことであると述べ、機械翻訳をめぐる哲学的に議論する際にこのように定義した。本稿は機械翻訳を技術の視点ではなく、翻訳通訳学の視点から考察しようとする試みであり、機械翻訳を使

ったコミュニケーション過程に焦点を当て、機械翻訳と使用者との関係性について検討するため、「デバイス・アプリ」の形態で機械翻訳を捉えるこの定義で適切であると考えられる。

II 先行研究と研究の枠組み

本稿は、中国の日系企業において日本人駐在員がいかなる場面で、どのように機械翻訳を用いるかを調査して事例として記述する。そして事例に基づいて、翻訳通訳研究における「位置付け (positioning)」の概念を使って、機械翻訳を介したコミュニケーションにおいて一参加者である日本人駐在員がいかに機械翻訳を位置付けるかを考察する。本節では、位置付け (positioning) の概念、および異言語間コミュニケーション方略としての機械翻訳の2つの面から先行研究を概観する。

2.1 翻訳通訳研究における位置付けの概念

位置付け (positioning) の概念は、「共同に作られるストーリーラインにおいて客観的にも主観的にも一貫した参与者として、会話内に自身を位置付ける談話のプロセス」と定義され、「社会的相互行為において発生し、動的な人間関係の一部である」と捉えられる (Hermans 2019)。この概念を通訳に適用する場合、例えば対面通訳の場合、通訳者は声やボディーランゲージ、または発話の調整などの手がかりを通じて、どちらか一方のために働いているのかを示すことは、当該コミュニケーションにおける通訳者の位置付けであると見なされる。Baker(2006)も、翻訳 (通訳) 者は言語使用域の選択を通じて自分自身または参与者の一人一人を位置付け、それによって特定の社会集団と結び付けている主張し、通訳者が直示のシフト (人称の変換) や発話の調整を行ったりする行動によって、何らかの価値観 (ナラティブ) が共有され、肯定され、異議申し立てられ、弱体化される可能性があるから見なされる。このようにして翻訳・通訳は「社会的相互作用の一形態」となるため、翻訳者・通訳者の位置付けは「その社会的およびイデオロギー的意味」にあり、「倫理的な意味合いを持っている」 (Hermans 2019)。発話における位置付けは、個々の発話そのものだけでなく、発話を含めたコミュニケーション全体における遂行性に注目する立場である。すなわち、話された内容そのものよりも、その内容を通して伝えようとしている、あるいは伝えているように見える話者の態度のほうが重要であるとされる (ibid.)。

機械翻訳を介するコミュニケーションの場合、原則、機械翻訳は自身を位置付けることが不可能であろう[ただし、機械翻訳による訳出が「無色透明」とは言えないことが問題視される。西田 (2019) は、機械翻訳に内在された「言語帝国主義の潜在化」について注意を喚起した。現在最も普及されているニューラル機械翻訳技術はコーパスベースであり、大量の対訳データを深層学習した上で「最善」の訳を生成している。その中に、学習に使われるデータ自体に偏りが潜まれており、また A 言語から B 言語に訳出された際に仲介言語 (つまり、英語) が存在していることは、いずれも機械翻訳のユーザーレベルでは気づきにくい点である。よって、機械翻訳が深層学習で使われるデータ自体が位置付けられ、

なんらかの価値判断としてフレーミングされている可能性が考えられるものの、いかなる形式で組み込まれているかを観察することが困難ではないかと示された。]。しかし、位置付け（positioning）の概念は「自身を位置付け、他者に位置付けられるという二重の視点」を有する（Hermans 2019）ため、人間である参加者がいかに機械翻訳を位置付けるかについては分析できる。翻訳者の位置付けを明らかにする際には、翻訳者自身の語りから分析する手法がしばしば使われる。

よって、本稿は、機械翻訳（＝翻訳「者」）が参加者によってどのように位置付けられ、その位置付けがコミュニケーションの構築にいかに関連するのかを考察する。具体的には、参加者が機械翻訳に求められる役割に加え、どのような場面で機械翻訳を利用するかあるいは利用しないか、さらにその理由および使い方を明らかにする。こうした位置付けが、参加者による訳出の解釈やコミュニケーションの構築にどのような影響を与えるのかを検討する。

2.2 異言語間コミュニケーション方略としての機械翻訳

本稿は中国の日系企業における、日本人駐在員と中国人社員との間に、機械翻訳を介した対面コミュニケーションを研究対象にするため、異なる言語を使う者同士が会話する際に用いられる異言語間コミュニケーション方略に関する先行研究を取り上げる。

木村（2021）は、異なる言葉を使う者同士のコミュニケーション方略を「英語の使用」、「単一の当事者言語」、「言語的仲介」、「エスペラントの使用」、「自言語不使用」、「受容的多言語使用」の6つにまとめた。そのうち、「言語的仲介」という項目で機械翻訳について論じた。通訳の場合、口頭コミュニケーションでは「当事者相互の関係や感情、その場の雰囲気や考慮して解釈した訳を行うこと」や、場合によっては「非言語的要素や話し手の文化的背景を踏まえた、また話の流れに基づいて発話の方向性を予知した訳の調整」が必要であるため、機械にはそのようなことができない。ただ、機械翻訳は「これまで通訳を使用することが困難であった、観光や商用などの領域のうち、決まった表現が多く用いられる場などで力を発揮することで、通訳という方略使用の間口を広げる功績が大きいだろう」とし、ビジネス場面で機械翻訳の使用促進に一定の役割を果たせると示唆される。

実際、ビジネス場面において、高橋（2024）の調査によると、ビジネス通訳現場でAIを利用した機器が導入されていることが分かった。一部の通訳者は時間の余裕がない時に、「事前の会議の準備段階や現場で用いられる原稿を予め DeepL や Google 翻訳などの自動翻訳機を利用して、大体的内容を把握したりする」ことが明らかになった。こうした研究結果によって、ビジネス場面において、人間の通訳者と AI との協働が有効であることが示唆される。

なお筆者は、中国の日系企業に勤める日本人駐在員2名が業務を遂行する際に、いかに機械翻訳を用いているのかについて調査した。完全に中国語を話せない調査協力者はもちろん、上級中国語レベルを有する調査協力者も機械翻訳を使用していることが分かった（朱 2024）。中国語を話せない調査協力者は、機械翻訳の訳出正確性に対して不安を感じつつも、機械翻訳を使えざるをえない状況に置かれるため、入念に前編集をして機械翻訳の訳出精度を上げようとする。具体的には、主語を入れたり、分かりやすくてきちんとし

た日本語を産出したり、「こうした方がいいんじゃない」ではなく「こうしてください」とのように明確な言い方をしたりするといった方法を用いて注意深くテキストを産出している。そして相手のリアクションに基づいて機械翻訳による「正しさ」を検証し、使用を繰り返して次第に機械翻訳を使う不安を和らげて、機械翻訳に対する信頼を蓄積したと言える。一方で、中国語上級能力を有する調査協力者は、主に中国語の書類を読む際に機械翻訳を使い、補助的な役割として使用していることが分かった。文書を作成するときに機械翻訳による訳出を参考にしても、そのまま使わずに、用途などに合わせて「責任を持って」後編集をする必要があるという意識を持っていることが分かった。

本稿は「対面コミュニケーション」に限定してさらに研究を深めるため、中国語を解さずに、一对一の会話で機械翻訳を使った中国人駐在員を研究対象とする。詳細は、次節にて述べる。

III 事例と分析

本節において、中国における日系企業に勤めている日本人駐在員がどのような場面で機械翻訳を用いているか、そして具体的にどのような形式で用いているのかを分析する。この分析結果を踏まえて、次節においてこうしたコミュニケーションにおいて参加者がいかに機械翻訳を位置付けるのかを考察する。本稿では、前節に挙げた朱（2024）での調査協力者 JPA 氏（中国語を解さない日本人駐在員）を研究対象とする。JPA 氏には 2 回の半構造的インタビューに協力してもらい、1 回目は 2024 年 3 月に行い、2 回目は 2025 年 8 月に行った。

まずは 1 回目の調査結果（朱 2024）に基づき、JPA 氏の背景について説明する。JPA 氏は 2023 年から日系企業の中国工場に技術管理者として駐在を開始した。現地では専任の通訳者が配置されておらず、部下の中に技術業務のかたわら通訳を兼任する中国人担当者がいるのみで、必要に応じて随時通訳を依頼できる体制にはない。一方、業務を遂行する上で、JPA 氏は日本語を解さない部下や生産現場の作業員などの中国人社員とコミュニケーションする必要性があり、機械翻訳を利用せざるをえない状況に置かれている。企業内の体制上、JPA 氏は管理職として業務指示や意思決定を行う優位な立場にある。しかし、言語環境の観点からは、現地で使用される中国語を十分に運用できないため、中国人社員とのコミュニケーションにおいて不利な立場に置かれている。こうした背景の影響により、機械翻訳の利用が業務遂行上求められる状況が生じた。JPA 氏は日常的に、現地の中国人社員との一对一の会話において、iPhone に搭載された無料機械翻訳サービスを利用している。しかし、訳出精度に対して不安を抱いているため、機械翻訳を介してコミュニケーションを行う際には、前編集の段階で明快な日本語を入念に産出し、それを文字入力によって翻訳アプリに入力している。表示された訳出を確認したうえで、JPA 氏は訳文の漢字に基づいて翻訳されているかどうかを感覚的に判断し、不自然であると判断した場合には、日本語を再入力して再度訳出させている。納得のいく訳出が表示された場合には、それを中国人社員に提示し、相手の反応を手がかりとして、訳出の正確性を確認している。一方、中国人社員は音声入力によって発話し、機械翻訳に訳出させることが多く、そ

の結果、訳出された日本語が難解になる場合がある。このような場面では、JPA 氏はしばらく画面を注視して理解を試みるが、これを受けて中国人社員は JPA 氏の反応から訳出の不十分を察知し、再度音声入力を行うか、あるいは文字入力に切り替えて訳出させ、会話の修復を試みる。このように、JPA 氏と中国人社員は機械翻訳を介してコミュニケーションする過程において、互いにスマートフォンの画面を見せ合うことで訳出内容を共有し、理解のすり合わせを行っている。

本研究は 1 回目の調査を実施した後、約 1 年半を経て第 2 回の調査を行った。この期間において、JPA 氏は駐在年数が約 1 年から約 2 年半になり、中国語もほとんど話せないレベルから、日常で用いられる言葉や業務上の短い会話が可能になるまで上達し、言語能力が向上した。よって、1 回目と比べると、中国語優勢の言語環境へより適応できるようになり、さらに現地従業員との人間関係も深まった。利用する機械翻訳サービスは、iPhone の無料翻訳アプリで変化がない。

1 回目の調査と同様に、インタビューを実施する前に研究と調査の旨およびプライバシー保護など諸事項を記載した「調査協力依頼書」を送付し、同意を得た上で日時を決めて Web 会議システム (Teams) を用いてインタビューを実施した。主に以下の 5 つのテーマを中心に語ってもらった。

- (1) どのような目的で、このコミュニケーションをしたか。
- (2) 具体的に、どのような文字を入力されて、機械翻訳がどのように訳出されたか。
- (3) この訳出では、意思疎通ができたか。相手はどんな反応だったのか。
- (4) このようなコミュニケーションで、特に気になる点はあるのか。

集めたデータをケース・スタディの手法で分析する。質的ケース・スタディという研究方法は、「特定主義的・記述的・発見的」という特性を有する。「特定主義的」とは、ある特定の状況や出来事に焦点を当て、何らかの現象を明らかにすることを指す。「記述的」とは、ケース・スタディの最終産物は研究している現象の記述であることで、こうした記述は「時間的経過のなかの、それらの相互関係が描写される」ような縦断的なものも挙げられる。「発見的」とは、記述と分析によって、研究対象の現象の再考に繋がる新しい意味を発見させ、それまで知られていなかった関係性や変数がケース・スタディによって発見されるものである。ケース・スタディは全体論的な記述と説明に着目し、その説明は文脈のなかにおける解釈が強調される。ケースという単一の現象や実体を集中的に注目することによって、調査者は、ある現象に特徴的な、重要な要因間の相互作用を示そうとするのである。本稿はこうした記述的な立場を取り、JPA 氏が置かれた社会的背景・言語的環境に特定し、機械翻訳を介したコミュニケーションを記述して分析することによって、機械翻訳が相互行為の中でどのように用いられ、意味構築の過程においていかに位置付けられるのかを明らかにすることを試みる。

以下では JPA 氏の実際のコミュニケーション事例を取り上げる。事例は、2 回目の半構造化インタビュー調査の語りデータからまとめた。インタビュー調査は最初から最後まで録音され、筆者がその音声を聞いて文字起こし、そしてデータに番号をつけてコード化した。以下は、コード化したデータからまとめた事例を示す。「【事例+番号】」は本稿にお

ける事例の通し番号で、続いたのは JPA 氏の語りに基づいてまとめた事例、最後にデータ番号を示す。分析と考察に使うデータは、主に 2025 年 8 月に実施した 2 回目のデータを中心とするが、必要に応じて 1 回目のデータを使用する際はデータ番号で区別する。データ番号は「24/25-JPA-〇〇」という表記を用いて出自を示す。「24」または「25」はインタビュー調査の実施年を示し、〇〇はコード化された当該語りの番号を示す。JPA 氏の語りにおける括弧内の内容は、理解を助けるために筆者が追加した補足である。

【事例 1】

（工場で生産している）製品で、（品質の）不良が発生したその対策をする時に、（中国人の）担当者がいきなり設備の調整をする。[中略]（中国人の担当者は）ボルトを交換してみたりとか、いきなりやるので、そうじゃなくて、まずは原因を確認して、原因は何か掴めたら、その原因に対して対策しないと、全然違うことを対策することになるかもしれない。原因が全然別かもしれないから。そういう時に、具体的には（機械翻訳を）使います。[中略]生産している中で、そういう（製品の不良）問題もやっぱりたまに出てくるんですね。（問題が）出てきた時に（中国人）担当者が、これはこうだと思い込んで、調整をし出すんですけど。この調整が間違ってることがあって、やっぱり。[中略]後から元に戻せないっていうふうにもなるから、そこは慎重にやって、っていうことを（伝える）。まずはこれを確認これを確認、でここでこれが分かったら、それに対してこうアクションするっていう話をする時に、まあ通訳がいる時間帯であれば、通訳できる人を呼ぶんですけど、そういうじゃない時も、夜とか 7 時とか 8 時になって、通訳がいなくてという時が。[中略]（トラブルが起きたあと、）そのまま、（中国人担当者が）自分でこう（考えるん）だと言って（設備の調整を）やり始めたり、あとは N 部（の中国人担当者）とか（ほかの中国人）スタッフがいたら、N 部（の中国人担当者）としてもこうじゃないかって言ったりして、二人とか三人のなかで話しをして、そこで（設備の調整を）やり出す。だけどその中には原因を確認するステップがないので。[中略]一旦もう、作業が、なんか触ろうとしたら一旦止めて、いや今何やろうとしてるのって（確認する）。[中略]まず問題は何っていう話から、今どういうふうに（設備を調整）しようと思ってるの、（トラブルの）原因は掴めているの、っていうところを確認して。それ（原因と対策）を確認してまあこっちもそう（思う）だよなって（いう合意に達することに）なれば、そのまま（設備調整を）やってもらうし、いやいや、これ（設備の調整）はちょっとまだやっちゃだめだろうっていうところはちょっと待って、一回止めて、もう一回（トラブルの原因は）何でか一緒に考える。[中略]もうとりあえず、ちょっと待ってて、何だっけ、「等一下（日本語：ちょっと待って）」。[中略]（機械翻訳を通じて質問したら中国人従業員は）一応ちゃんと答えてくれて、これをやろうあれをやろうっていう（対策の方法）は一緒に決めて。決めるんだけど、やっぱり上手く伝わってないとかっていうのがあって、（設備の調整を）やり始めたら、いやいやいや、そうじゃなくてっていうことはただある。[中略]あれさっきそれ（設備のとある部品）を外せて言ったんじゃないのに何でそこ外してる？みたいなこととか。[中略]（25-JPA-50,52,56,58,64,66,68,72,78,80）

【事例 1】は、製品の生産中において、設備による製品の品質不良が発見され、設備を調整する必要がある場面である。生産が長い間停止することは工場にとって好ましくない状況であるため、迅速な対応が求められる状況である。語りで繰り返し述べたように、JPA 氏は原因を掴めてから対策することが最も重要だと考えていることを示した。しかし中国人部下は十分な検討をせず、またはほかの部署の中国人社員と話し合った結果を JPA 氏に報告せず、設備の調整を始めようとする。そこで JPA 氏は中国語を発して中国人従業員の行動を速やかに止め、機械翻訳を使ってやりとりを始めた。そして部下である中国人従業員も機械翻訳を使って答え、二人で「一緒に考え」て「一緒に決める」とあるように、JPA 氏と部下が機械翻訳を使って対策方法を協議する。

【事例 1】により、この場面において JPA 氏は機械翻訳を第一の選択肢としていなかったことが示される。JPA 氏はまず、部下が不適切な行動を取ろうとする際に、自身の中国語レパートリーの中から当該状況に適した表現「等一下（ちょっと待って）」を用いて発話して速やかに止めた。しかし、部下とトラブルの原因やその対策について議論するのに必要な中国語は、自身の運用能力の範囲を超えたため、その段階で機械翻訳を使い始めた。このことから、機械翻訳は当初から選択されていた手段ではなく、言語的制約に直面した段階で動員される補完的資源として位置づけられていることが示唆される。

しかしその後、JPA 氏は部下が協議した内容と異なる対処を講じたことを発見した。その原因について、上記の語りにおいて JPA 氏は「上手く伝わってない」と述べたが、筆者がさらに詳細を尋ねると、JPA 氏は以下のように語った。

【事例 1-a】

正直、（機械翻訳の問題は）あると思っています。100%は絶対そのまま自分が伝えたいことが翻訳できてるかかっていうかたぶんできていない。[中略]3割4割ぐらいですかね、そういうあんまり伝わってないのは。（ただし）それが（なんの原因なのか）わかんないです。その翻訳がちょっとおかしいのか、それとも、こっちの説明が悪いのか、向こうの受け止め方が悪いのか、どこが悪いのかはわかんない。（25-JPA-82,98）

この語りから、JPA 氏は機械翻訳を介したコミュニケーションが複数の段階から成るものとして捉えている意識が示された。【事例 1】における意思疎通の齟齬が生じた要因について、JPA 氏は機械翻訳による訳出の問題、自身の伝え方、聞き手である中国人社員の理解という3つの可能性を挙げ、いずれか一つに原因を特定するのが困難であることを述べた。JPA 氏が挙げた3つの可能性は、機械翻訳を介するコミュニケーションを構成する3つの段階に対応し、こうした一連の過程のいずれの段階にも不確実性が含まれている。さらに、JPA 氏が中国人部下の行動を観察し、協議した内容と異なった対策を発見して問題が表面化した時点と、JPA 氏が挙げた三つの段階のいずれかにおいて問題が生じた時点との間には、タイムラグが生じる可能性がある。このように、言語的媒介を通じたコミュニケーションには本来的に不確実性が伴うが、機械翻訳を介在させることで、その不確実性はさらに可視化されにくくなる。

上記の【事例 1-a】に続き、このような認識のずれが起きたあと、JPA 氏は方略を変えて

対応している。

【事例 1-b】

身振り手振りもそうだし、実際に目の前に設備あるので、この設備を、この部分、ここを調整するとか（を示す）。まあ言葉だけ、（機械翻訳が訳した）その文章だけ見せてってやると、どこかたぶん違うところ触ったりするんで、（設備を指しながら）ここね、もうこのボルト調整ねとか、高さを調整してねとか、実際のもので説明する感じです。[中略]（部下を）止めます。止めないととんでもないことになるので。（25-JPA-100,280）

中国人部下の行動を観察し、【事例 1】においてコミュニケーションが成り立たなかったことに気づいた JPA 氏は、機械翻訳のみに頼らず、ジェスチャーを取り入れたマルチモーダルな手法を使って会話の修復を図った。不確実性やタイムラグの存在によって原因を特定することが困難である中、JPA 氏は効率を優先し、自身の資源を最大限に活用し、コミュニケーションを成り立たせる姿勢を示した。

以上のことから、JPA 氏は機械翻訳を中心に据えるのではなく、相互行為の中でほかの手段と組み合わせながら運用することを示した。

【事例 2】

（中国人社員の発話が機械翻訳アプリによって）日本語に訳された時に、強い口調みたいな翻訳が出て、だけど結局はこの時の状況で、その子の雰囲気とか態度とかを見ると、いやいやそんな強くは言っていないよねっていうのが分かるので、だから普通にそれは機械翻訳で出た言葉、ただ単純に翻訳された言葉だけで捉えて意味だけを理解する。[中略]（あの時に話した相手は）毎日話をするわけではないけど、N 部の人（中国人社員）だった。顔も知ってるし、簡単な言葉、挨拶とかも、簡単な（中国語の）言葉だけ話をするっていう人ですけど。（この人は）別に性格的にも、すごい荒れてる性格でもないし。なので、まあ翻訳された言葉がそうなのだろうなって思っただけで、あんまり気にしてはいないです。（25-JPA-285,287）

【事例 2】において、機械翻訳による日本語がインポリイトに受け取られうる場合、JPA 氏は訳出テキストのみで判断せず、その場の状況および雰囲気、さらに発話者である中国人社員の態度や性格といったパラ言語的要素および相互行為のコンテキストを含めて、総合的に訳出テキストを理解していることが言える。本事例の発話者である中国人従業員は、頻繁にではないが、日常の業務から JPA 氏と簡単な中国語でやりとりを重ねる中で、JPA 氏と一定の関係性を築いてきたと見られる。このような関係性は、機械翻訳によるインポリイトな日本語表現に左右されないことが示唆される。一般に、互いに言語が通じ合う者同士は、言葉を交わしながら相手はどのような人なのかを見極め、人間関係を築くことが可能である。しかし、機械翻訳を介したコミュニケーションにおいては、発話内容や訳出テキストそのものよりも、むしろパラ言語的情報および相互行為のコンテキストが理解の手がかりとして目立つようになるのではないかと示される。

ただ、その前提として、JPA 氏は機械翻訳の訳出にポライトネス面を求めるのか。以下の語りでJPA 氏の観点を明確に示した。

【事例 2-a】

（機械翻訳による訳出が）ていねいかどうかっていうのは、あんまり意識したことないかな。あんまりそこは気にしてない。[中略]意味が分かればいいかな、それだけ。機械翻訳を通して話をする中で、相手の表情は目の前にあるので、それがすごい怒ってその文章を打ってるのか、それとも、これ本当ごめんなさいだけどこれやってほしいんですとかっていう話で、これは態度とか表情とかで分かるんで。なので意味が伝わってきて、それで表情とかその雰囲気がプラスされたら、これはもう今例えばすごい急いでるんだなっていうのももちろん分かる。意味が分かればいいっていうぐらいで自分は使ってます。(25-JPA-152,154)

この語りから、JPA 氏は機械翻訳に求めている役割は、意味の伝達に限定されていることがうかがえる。換言すれば、機械翻訳は発話意図や対人関係の調整を担うものではなく、あくまで補助的に情報を伝達するための手段として位置付けられている。それに加えて、JPA 氏は相手の表情、態度、場の雰囲気といったパラ言語的情報をより重要視し、それらを手がかりとしてコミュニケーションを成立させている。このように、機械翻訳による意味伝達と、パラ言語情報に基づく対人的判断とを役割分担させることで、JPA 氏は機械翻訳を組み込んだコミュニケーションを実践しているのではないと言える。

【事例 3】

すごい簡単な（中国語）、本当に簡単なことだけだったら、この人（JPA 氏を指す）だったら、これぐらい（の中国語）だったら、分かるはずっていうのは分かってくれてるので、いつも話してる子たち（中国語部下を指す）は。なのでそれぐらいだったら伝えてくれたり、中国語で。だけど、そこも、自分の理解できてる範囲を超えてくる（中国語の）言葉はもちろん分からないんで、（いつも一緒に仕事している中国人部下は、）たぶんそこまで言うとは伝わらない、こんだけ伝えようと思っても伝わらないなあ（と思った時に）、さきに（機械翻訳アプリを使って）翻訳して見せてくれる。そこはいつも一緒に仕事してる子（中国人部下を指す）なので、（このように）やってくれるっていうところですね。[中略]考えてくれる、向こうも。[中略]逆に今話挙げたその子（前述の中国人部下を指す）もすこしだけ日本語が分かる。本当に、自分も少しだけ中国語が分かるっていうぐらいのレベルなので、相手がこれぐらいだったらたぶん分かるだろうなあ、っていうのをお互いにそういうのを持って、ちょっとだけだったら、日本語で話をするんだけど、あっ、今の（伝えようとする）言葉たぶん分かってないなあ、またちょっと（機械翻訳アプリで）翻訳したりとかで。(25-JPA-192,196,198,200)

この事例は、JPA 氏が 2 年半にわたり共に勤務してきた中国人部下との間で用いられている異言語間コミュニケーション方略を示したものである。本事例において、JPA 氏およ

び中国人部下は、限定的な表現を使用できる程度の中国語または日本語の運用能力を有している。さらに、職場において多くの相互行為を積み重ね、互いの言語能力および日中両言語のレパートリーについて一定の把握がなされている。そのため、両者はコミュニケーションに際して機械翻訳を第一の選択肢とせず、「受容的多言語使用」方略（木村 2021）を用いながら、相手にとって受容可能であると見なされるレパートリーの範囲内から言葉を選択して発話を組み立てる。そして、受容可能の範囲を超えたと判断した場合にのみ、機械翻訳を用いて補完する。ただし、このような方略に基づく異言語間コミュニケーションを成立させるためには、相手の理解可能な言語資源を見極めた上で発話する能力が双方に求められる。また、こうした判断が可能となるためには、長期間にわたる相互行為を通じて関係性が構築されていることが前提条件となる。

この事例から、機械翻訳が第一の選択肢とならない理由は、両者の経験の蓄積によって相互の言語資源に対する理解が形成された点にあると考えられる。特定のコミュニケーション相手であれば、相互行為の積み重ねを通じて相互の言語資源が共有され、尚且つ信頼関係が築かれているため、機械翻訳は主要な手段ではなく、補助的に用いられる資源として機能することが可能になる。

【事例 4】

（中国人社員などが自分に向けて中国語で）バーツと話をした時に、こっちはさっぱり分からない。すごい速い言葉で、普通に話し言葉で話をされて、まったく分からないなあって思って、こう、「听不懂（日本語：聞き取れない）」って言う。[中略]（まずは機械翻訳を）使わずに、三回ぐらい、いや（あなたが言っている中国語は）分かんって話をしていると、こっちが機械翻訳で「何が問題なんですか」とか打って、（機械翻訳で訳された言葉を見せると、自分（相手の中国人を指す）も同じように携帯の翻訳を使って、話し始める。（筆者：これは、自分の部署ではなくて、普段あんまりしゃべらない人のことですか？）ああ、そうですね。そういう人のほうが多いですね。[中略]これね、会社だけでなく、町でタクシー乗った時とか、こういう時もよくあるんです。タクシーの運転手が「なに人」って聞いて、（中国語で）「日本人」って答えて、それでなんかすごい（中国語で）話をしてくるから、また「听不懂听不懂（日本語：聞き取れない、聞き取れない）」って言って、「そうなんだ」みたいな感じで「ははは」って運転手さんも言ってるんだけど、また 5 分ぐらいすると、中国語ですごい話しかけてきて、だから分かんないって、分かんないって言ってるでしょって思いながら。[中略]あらかじめ最初に翻訳機で話をし始めると、あっこの人は中国語分からない人だなのっていうのは、認識を持ってくれるのになって。[中略]だから話ができないから、分からないから、翻訳機を使ってるんですよという、アピール（ができるのだ）。（25-JPA-170,178,179,180,182,184,216,228）

本事例は前述の事例と同様に、JPA 氏が機械翻訳を第一の選択肢としない状況を示す一例である。業務上の関わりが少ない中国人社員や、その場限りで会話を交わすタクシーの運転手は、いずれも JPA 氏の中国語能力を把握していない発話者であり、前述の【事例 3】のように、JPA 氏の理解可能な言語資源を見極めた上で発話を産出することができない。

さらに、JPA 氏が発した中国語「听不懂（聞き取れない）」や「日本人」によって、相手が JPA 氏の言語能力を誤って判断する可能性も考えられる。このような状況において、JPA 氏は機械翻訳を用いることで、自身の言語能力の制約を相手に可視化し、会話の前提条件を調整している。換言すれば、JPA 氏が機械翻訳を持ち出す動作によって、会話の前提条件は「互いに中国語を理解できる者同士である」という相手の想定から、「会話の一方が中国語を解さない」という想定へ切り替えられ、しかもそれが相手に理解可能な形式で示された。そのため、機械翻訳は第一の選択肢として用いられていないものの、相手に JPA 氏の言語能力を気づかせ、相互行為を開始・修復させるための重要な手がかりの一つであることを示した。

さらに、このような方略を採用するのは、タクシーの運転手ではなく、社内の中国人社員、またはいきつきのレストランの店員を相手にする際であることが後の語りで分かった。

【事例 4-a】

（筆者：なんか場面で使い分けてる感じですね。）あー、きちんとコミュニケーション取りたい時は（機械翻訳を）使いますね。まあ変な話だけど、この人とはもう別に、今後関わり合いもないし、なんかよく分かってなくても、別にいいやっていう時はもう、何も使わない。（25-JPA-261,262）

上記の語りで、JPA 氏は機械翻訳を「きちんとコミュニケーションを取りたい時」に限定して用いていることが分かった。すなわち、コミュニケーションの目的が業務の遂行や人間関係の構築といった重要性を伴う場合のみ、機械翻訳を意図的に選択し、やりとりに対する関与の度合いを切り替えている。

【事例 5】

（話す相手が）初対面だったら、最初は通訳の人、誰かお願いするんです。まあでも、そういう時でも、もう通訳（者を）呼んでるのを面倒くさいとか（思うときには）、もう翻訳機使って話しますね。[中略]ずっと通訳の人が付いてくれるのであれば、（人間の）通訳（者）のほうがいいです。（人間の）通訳（者）のほうが、いい、楽っていうのかな。まあ信頼度も（人間が）通訳やってくれたほうがあるかなって、感覚的ですけどね。（筆者：今「楽」っておっしゃいましたが、通訳者でしたら、例えば曖昧な言葉を判断してもらえるんですね。機械翻訳でしたら、A さんがご自身で考えないといけないですね。）そう、自分で（入力する日本語を）考えて、（機械翻訳アプリで）翻訳された中国語を見て、あれ、これは違う意味で、なんか変に翻訳されてるような気がするってなったら、ちょっと文章を消して、もう一回違う言葉で、説明を打ち直す。（25-JPA-214, 274,275,276）

本事例では、初対面の人々とのコミュニケーションにおいて、JPA 氏は機械翻訳よりも人間の通訳者への依頼を選好する傾向を示している。これは、前述の【事例 3】および【事例 4】にも垣間見られたように、自身の言語能力の制約および人間関係が未構築であ

ることに関係すると考えられる。さらに、この語りにおいて、人間の通訳者に関して述べる際に「面倒くさい」および「楽」という表現を使ったのが興味深い。JPA 氏は、人間の通訳者を呼ぶのが「面倒くさい」が、人間の通訳者に訳してもらうのが「楽」であるという考え方を持っている。JPA 氏の職場では、専任の通訳者が配置されておらず、通訳を依頼できる中国人部下は主に技術の業務を担当している。したがって、JPA 氏は中国人社員とコミュニケーションを取る必要が生じた場合でも、部下の事情を考慮すると容易に依頼できない可能性が考えられる。こうした場合、JPA 氏は機械翻訳を用いている。1 回目の調査において、JPA 氏が機械翻訳のメリットについて「ずっと通訳さんも一緒に（いることは）そんなわけにはいけないので、（機械翻訳の）メリットとしてはやっぱり、持ち歩ける」（24-JPA-150）と述べ、通訳者の代替として、尚且つ通訳者の不在を補う手段として機械翻訳を肯定的に捉えることが明らかになった。一方で、人間の通訳者を介してコミュニケーションするのが「楽」という点については、のちに述べたように、発話の前編集、および訳出に対する不安が不要になるからであると考えられる。さらに、人間の通訳者に対する信頼については1回目の調査と同様であることも分かった。1回目の調査において、JPA 氏は通訳者が自身の日本語能力および通訳能力を発揮し、それを周囲に示してきた努力が可視化されている点から、機械翻訳よりも信頼しやすいと認識している可能性が示唆された。このように、人間の通訳者は「楽」で「信頼度がある」存在であるにもかかわらず、随時利用できないというデメリットを補うために、JPA 氏は機械翻訳を用いていることが明らかになった。

【事例 6】

（機械翻訳を使う場面が）もっとあるといいなと思ったのは、例えばこの携帯を、ポンと机の上に置いて、翻訳開始ってやった（＝ボタンを押した）時に、相手の言葉、自分の言葉、全部拾って、本当、同時通訳を続ける。（筆者：有料ではあるようですね。）有料だと、あんまり、そこまでして、でも思うし。[中略]まあお金を払ってまでは、別にそこまでは要らないかなと思うけど。無料であればいいかなって。[中略]それをどっか、飲み会とか、部署でこっちのメンバーで飲みに行く時とかに置いていくといいですね。（筆者：今飲み会では機械翻訳を使わないですか。）そういう時には、全然使わない。なんかもう、飲め飲めの世界になっちゃって、私が飲むか、そんな感じになっちゃって。（25-JPA-234,239,248,252,254,255,256）

上記の語りにおいて、前述の事例と同様に、JPA 氏にとって機械翻訳が主要な言語支援手段ではなく、補助的・代替的手段として位置付けられていることを示唆した。また、機械翻訳の有料化を利用しないという態度は、前述の事例からも浮かび上がった、機械翻訳を完全に信頼していないという認識を踏まえると、JPA 氏が機械翻訳の有用性を認めているものの、信頼を伴う価値付けの対象、あるいは専門的資源として位置付けられていない可能性があると考えられる。

なお、本事例によって JPA 氏は現在部下との飲み会で機械翻訳を使っていないことが分かった。しかし、語りにも見られたように、部下とのさらなるコミュニケーションを可能

にするために、いちいち操作を行わずに利用できる機械翻訳の機能を求めていることも分かった。日系企業において飲み会は、日常の業務と一定の境界線を引いた非日常的な場面であり、通常の下上関係が一時的に緩和され、社員同士が打ち解けた形で交流することを通じて、新たな人間関係を構築する場であると見なされている。しかし、JPA 氏は言語的制約によって、こうした場面において、部下との即時的なやりとりを十分に行うことができず、期待される関係の構築に十分に参与できていない状況にあると考えられる。ただこうした機能は有料で利用可能であるものの、JPA 氏は「そこまでは要らない」と思っている。それは、前述の【事例 4】および【事例 4-a】を踏まえて推察すると、JPA 氏にとって飲み会は、情報伝達の間というよりも、部下と同じ場の雰囲気共有することに重きが置かれる場面であるからではないか。機械翻訳の操作は会話の同期性や相互行為のリズムを損なう可能性があるため、JPA 氏は飲み会という相互行為の場面において、会話内容の正確な理解よりも、場を共有することを優先したのではないかと推察される。

IV 考察

前節において、JPA 氏の語りにより、どのような場面において機械翻訳をいかに用いているのかを示した事例を挙げて、それぞれの事例において JPA 氏がいかに機械翻訳を位置付けるかを分析した。本節においては、JPA 氏の 6 事例を合わせて、機械翻訳の位置付けによって、JPA 氏がいかにコミュニケーションを構築するのかを考察する。

まず、すべての事例に共通して言えることは、機械翻訳が第一の選択肢や主要で中心的なコミュニケーション手段、あるいは 100%信頼できる言語的資源として位置付けられているわけではなく、補助的・代替的な手段として位置付けられているという点である。JPA 氏は相互行為において、機械翻訳のみならず、自身の中国語レパートリーから適切な表現を選択したり、相手の日本語能力に応じて発話を調整したりするほか、ジェスチャーなどのマルチモーダル手段や、相手の声や表情、その場の状況や雰囲気といったパラ言語的要素を組み合わせながら、自身の意図や感情を相手に理解可能な形で産出し、また相手の意図や感情の理解を試みている。【事例 1】では、緊急な状況であったため、JPA 氏はまず中国語で「等一下（ちょっと待って）」と発話し、部下の行動を制止したうえで、自身の言語能力の制約を補うために機械翻訳を用いて部下とトラブルの原因や対策方法について協議している。しかしその後、機械翻訳を介して話し合った対策方法と、部下が実際に取った行動とが一致していないことに気づいた JPA 氏は、設備の部位を指し示すといったジェスチャーを用いて、会話の修復を行っている。機械翻訳を介したコミュニケーションにおいて齟齬が生じた際、JPA 氏はそれを機械翻訳に起因する可能性のある問題として捉えつつも、原因の不確定性を意識したうえで、最も効率的な方法を選択し、コミュニケーションを成立させている。【事例 2】では、機械翻訳によって日本語が強い口調で訳出されたものの、JPA 氏はそのテキストを相手の感情の直接的な反映としては受け取らず、中国人担当者の当時の表情や態度といったパラ言語的要素に加え、場の雰囲気や日頃の相互行為を通じて形成されてきた当該人物の性格理解といったコンテキストをより重視して理解している。JPA 氏の語りにおいても明言されているように、機械翻訳による訳出はあくまで情報を伝達するための手段として位置付けられており、訳出テキストそのものよりも、

こうしたパラ言語的要素やコンテキストが理解の手がかりとして重要視されていることが示された。

【事例 3】は、日頃のコミュニケーションを通じて互いの言語能力を把握している JPA 氏と中国人部下の一人が、機械翻訳を使わずに「受容的言語使用」の方略でやりとりを遂行する事例である。こうしたコミュニケーションが成立する前提としては、大量の相互行為の蓄積に加え、相手の言語レパートリーを的確に見極める判断力が必要とされる。この事例においては、JPA 氏と部下は 2 年半にわたって共に業務を行ってきた過程の中で、機械翻訳を介さなくても、相手の発話意図や感情を相互に推測・補完できる関係性が構築されていることが示唆される。そのため、機械翻訳は常時用いられる資源ではなく、相互理解が困難となる局面においてのみ、補助的に動員される選択肢として位置付けられている。【事例 1】～【事例 3】を通じて、機械翻訳はこうした複数の資源の一つとして用いられており、相互行為全体の中で補助的に機能しているという全体像がうかがえた。

なお、【事例 4】では、機械翻訳がコミュニケーションの前提を調整する手段として位置付けられている。【事例 1】～【事例 3】のように、JPA 氏と長期にわたって交流してきた相手ではない場合、JPA 氏の言語能力が誤って判断される状況が生じうる。こうした状況において、JPA 氏は機械翻訳を使用することで、自身の言語能力に制約があることを可視化して相手に理解可能な形で共有し、コミュニケーションを適切な軌道に乗せている。換言すれば、機械翻訳が情報伝達そのものにとどまらず、相互行為の前提条件を調整する資源として機能している可能性を示している。

一方で、【事例 5】は、JPA 氏が機械翻訳と人間の通訳者を比較した事例であり、ビジネス場面において初対面の相手とコミュニケーションを行う際には、人間の通訳者を選択することが好まれるという意識がうかがえた。しかし、人間の通訳者は必要な場面ごとに手配できるとは限らないため、その制約を補う手段として機械翻訳が用いられている。また本事例において、JPA 氏は人間の通訳者のほうが信頼性が高いと明言しており、信頼性の観点からは、機械翻訳を人間の通訳者よりも劣るものとして位置付けている。

最後に【事例 6】は、JPA 氏が機械翻訳の利用を「無料」に限定する点で興味深い。以上の事例からうかがえるように、JPA 氏は機械翻訳を専門的な資源や中心的なコミュニケーション手段、あるいは十分に信頼性のある手段として位置付けておらず、補助的・代替的な位置に付けていることが示された。こうした位置付けは金銭面にも表れており、機械翻訳の利用が無料の範囲にとどまっている点から、機械翻訳が補助的な資源として用いられていることが改めて確認できる。また本事例では、「飲み会」という場面について言及されており、業務遂行を主な目的としない場面では、機械翻訳の操作そのものが会話の流れを一時的に中断させるデメリットが生じる。よって JPA 氏は操作を介さず自動的に訳出される機械翻訳の機能を求めており、部下との関係性の構築に重点を置いている意識がうかがえる。

以上の JPA 氏の事例から、機械翻訳は単一の機能や固定的な役割を担うものとしてではなく、場面や相手との関係性、求められる相互行為の性質に応じて可変的に位置付けられていることが明らかとなった。JPA 氏は、機械翻訳を中心のかつ信頼性の高い言語的資源として用いるのではなく、自身の言語レパートリー、ジェスチャーといったマルチモード

ルな手段、さらには相互行為のコンテキストに対する認識と組み合わせながら、必要に応じて補助的・代替的に機械翻訳を利用している。すなわち、機械翻訳は相互行為そのものを担う主体ではなく、相互行為を成立させ、調整し、あるいは円滑に進めるための一資源として、全体のコミュニケーションの中に組み込まれていると捉えられる。JPA 氏はこのように、主体性をもって自身の判断や調整を前提としながら、機械翻訳を一資源として位置付け、相手との関係性や場面に応じてその使用範囲を細かく調整している。機械翻訳を使用する際には、機械翻訳に意味の産出や解釈などを委ねるのではなく、参加者（＝ユーザー）が中心となって責任を持ち、コミュニケーションの全過程を主導・再構成していく実践が不可欠であることが、本稿の事例から示された。

JPA 氏がこのように機械翻訳を位置付ける背景には、第 3 節で言及した状況が関係している。JPA 氏は技術管理者として駐在しており、企業組織においては相対的に優位な立場にある一方で、言語環境の面では中国語能力に制約があるため、コミュニケーション上は不利な立場に置かれている。言い換えれば、組織的な優位性と言語的な脆弱性とが併存する状況に置かれている。しかし JPA 氏は優勢な立場にしながら、現地社員との心理的距離を縮める立ち位置でコミュニケーションを構築している様子が、各事例からうかがえる。この点は、1 回目の調査において JPA 氏が「本当は通訳とか翻訳アプリとか使わずに、自分で話せるのが一番いい」（24-JPA-138）と述べていることや、中国語学習に継続的に取り組んでいる事実からも裏付けられる。

また、本稿の第 1 節に挙げた事例および調査による【事例 2】に示されているように、機械翻訳による訳出は必ずしも無色透明なものではなく、発話者の意図や感情をそのまま反映するものでもない。したがって、機械翻訳を使用する際には、JPA 氏の実践に見られるように、訳出テキストのみならず、相手の表情や態度といったパラ言語的情報や相互行為のコンテキストを含む複数の資源を総合的に用いながら意味を構築し、それに基づいて行動することが求められることが示唆される。

通訳研究における相互行為を前提にするモデルでは、二言語の対面コミュニケーションにおける通訳者の「中心的な位置」が強調される（ポエヒハッカー 2008）。この立場では、「通訳者の役割を単なる『交換手』というより、相互行為における積極的な参与者として位置付けている」（ibid.）。中国の日系企業における通訳者を介したコミュニケーションにおいても、状況に応じて通訳者が発話者の真意を汲み取って伝達したり、文化の差異を説明したり、不適切な発言内容を和らげたりして、主体性を持って相互行為の構築に関与していることが確認された（朱 2021）。言い換えれば、通訳者はコミュニケーションの「中心的な位置」に置かれていると言える。これに対して、機械翻訳の場合、上記の事例からは、「中心的な位置」に位置付けられていないことが明らかである。その結果、文化差や発話者の意図に対する理解、および発話内容の調整といった、従来通訳者が担ってきた役割は、異言語間コミュニケーションに参加する当事者双方に委ねられることになる。【事例 5】において JPA 氏が、人間の通訳者を利用したほうが「楽」であると語ったのも、この点に起因すると考えられる。したがって、機械翻訳は言語的変換の補助的手段とはなり得ても、相互行為を構築する主体として人間の通訳者にとって代わるものではないことが示された。

V おわりに

本稿は、中国の日系企業に勤める日本人駐在員がいかなる場面で機械翻訳を利用しているのかについて調査し、その結果に基づいて、機械翻訳を介したコミュニケーションにおいて機械翻訳がいかに位置付けられ、それがコミュニケーションの構築といかに関連するかについて分析と考察を試みた。機械翻訳の技術が普及する中、機械翻訳の適切な利用方法に関して何らかの示唆を提供できることが期待される。

なお、本稿では 1 名を対象に半構造化インタビュー調査を実施したが、今後はより多くの機械翻訳ユーザーに対して調査を拡大する必要がある。また、実際に機械翻訳を使用したコミュニケーションを記録し、会話分析の理論枠組みなどを用いて、コミュニケーションがどのように成立するかをさらに詳細に分析することも求められる。今後は、こうした多角的な調査と分析を通じて、機械翻訳がコミュニケーション過程においてどのように機能するかをより体系的に理解することが求められる。

謝辞

お忙しい中、インタビュー調査に応じてくれた JPA 氏に感謝を申し上げます。

参考文献

- Baker, M. (2006). *Translation and Conflict: A Narrative Account*. Routledge.
- Hermans, T. (2019) 'Positioning' in Baker, M. and Saldanha, G. (ed) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Third Edition. Taylor & Francis Books UK.
- 木村護郎 クリストフ (2021). 『異言語間コミュニケーションの方法：媒介言語をめぐる議論と実際』. 大修館書店.
- メリアム S. B. (2004). 『質的調査法入門 教育における調査法とケース・スタディ』. ミネルヴァ書房. [原著：Merriam S. B. (1998). *Qualitative Research and Case Study Applications in Education*. John Wiley & Sons, Inc.]
- 西島佑 (2019). 「機械翻訳は言語帝国主義を終わらせるのかーその仕組みから考えてみる」. 『機械翻訳と未来社会：言語の壁はなくなるのか』. 社会評論社. pp. 159-186.
- ポェヒハッカー F. 鳥飼玖美子 (監訳)、長沼美香子・水野的・山田優 (訳) (2008). 『通訳学入門』. みすず書房. [原著：Pöchhacker F. (2004) *Introducing Interpreting Studies*. New York: Taylor & Francis Group, LLC.]
- 高橋絹子 (2024). 「ビジネス通訳の現場における 生成 AI 機器の利用に関する調査報告」. 『関西大学外国語学部紀要』. 30. pp. 121-135.
- 朱藹琳 (2021). 「通訳者はいかにコミュニケーション摩擦に関与するかー中国の日系企業における社内通訳者の実例分析を通じてー」. 『通訳翻訳研究』. 20. pp. 41-65.
- 朱藹琳 (2024). 「異言語間コミュニケーション方略としての機械翻訳に対する「信頼」ー中国の日系企業に勤める日本人駐在員の語りからー」. 『言語と文化』. 50. pp. 31-51.